

報告書 (体育研究所プロジェクト研究)

ピエール・ド・クーベルタンが理解した柔術と柔道

Jiu-Jitsu^{注1)} and Judo as understood by Pierre de Coubertin

田 原 淳 子, 森 脇 保 彦

Junko TAHARA and Yasuhiko MORIWAKI

は じ め に

近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン (1863~1937) は、10,000ページ以上に及ぶ膨大な著作を残している。その中には、日本や武道に関する著述も存在する。フランス人で来日したことがなかったクーベルタンは、日本や武道についての知識をどこから得て、どのように認識していたのであろうか。1894年にIOCを創設し、1925年に引退するまでの約30年に渡りIOCを率いてきたクーベルタンが、日本人や日本の身体文化をどう理解していたのかを知るとは興味深い。それがのちにIOCのオリンピック・ムーブメントにも何らかの影響を及ぼしたとすれば、それを明らかにしていくことは、オリンピック史研究においても意義深いものとなる。

そこで、本研究では、クーベルタンの著作の中から、柔術および柔道に関する記述を取り上げ、クーベルタンが日本の身体文化である両者をどのように理解していたかを明らかにすることを目的とした。そのために、次の論考を分析の対象とした。

- ・ A Propos du Jiu-Jitsu. Revue Olympique, janvier 1906, pp.5-7.
- ・ Les Préliminaires du Jiu-Jitsu. Revue Olympique,

8e année, mars 1908, pp.41-44.

- ・ Le Judo. Revue Olympique, 12e année, I, janvier 1912, pp.11-13.
- ・ Le Judo. Revue Olympique, 12e année, II, février 1912, pp.24-27.
- ・ Le Jiu-Jitsu est-il un sport? Bulletin du Bureau International de Pédagogie Sportive, Lausanne, s.d.1933, n° 9, pp.11-13.

さらに、クーベルタンによる柔術と柔道の理解を日本の柔道専門家による視点で客観的に捉えるために、雑誌『柔道』に掲載された永田英二が解説した嘉納の柔術・柔道論と比較し検討した。

1. 柔術について

クーベルタンは、柔術に関する知識をスイス人のA. シェルピロの著書から得たようである。シェルピロは、ヨーロッパ最初の柔術の達人の一人で、フリースタイル・レスリングの世界チャンピオンであった。1901年にロンドンで日本の柔術家の上西貞一と谷幸雄に出会い、互いの技の美点を体得した。スイスに帰国すると、柔術の初歩を何人かの同僚に教え、1905年にポーツマスの英国王立海軍の将校を相手にレスリングの講習を任されたときには、この日本式レスリングの実演も取り入れた。シェルピロは自ら柔術に熟達し、優

秀な弟子を何人か育て、柔術の実用的な小教本を作成した。(Coubertin, 1908)

シェルピロは、柔術とヨーロッパのフリースタイル・レスリングの起源は共通であり、柔術は同じ原理から出発したフリースタイル・レスリングのひとつの流儀に過ぎないと考えていた。その原理とは、対戦相手を打ち負かすことを何の決まり事もなく追求することであって、求める結果を目指すものであれば、いかなる技を使ってもよいとする原理である。柔術は指および手全体が果たす役割と科学的な解剖学の活用という二つの点で、他のいかなる種類の自由格闘技とも異なると考えられた。(Coubertin, 1908)

シェルピロによれば、柔術を修行した日本人は、手のへりによる頸^{うなじ}への一撃だけで相手の頸椎を脱臼させ、死に至らしめることができる。人体の各急所には、第一にねじれや逆向きにされることに弱い箇所、第二に圧迫に弱い箇所、第三に手による一撃に弱い箇所があるという。人体の特徴は人によってかなり異なるので、まず、各人の体のゆがみが考慮される。日本人は正確さの訓練を非常に重視し、手のへりを硬くすること、指の力と敏捷さを高めること、攻撃すべき箇所についての知識を得ること、そしてその知識を、正確かつすばやい動きで活用する方法を体得することを目指す練習を行うという。(Coubertin, 1908)

クーベルタンは、柔術がいかなる武器も使わないさまざまな格闘技の総称として用いられ、これには体と体の技である「体術」、手を捉える技である「捕手」、しなやかさの技である「やわら」や「柔道」などがあり、攻撃と防御の方法が網羅し尽くされていたと述べ、柔術を広義に捉えている(Coubertin, 1912a)。この柔術と柔道の包含関係については、嘉納治五郎の認識とは異なる。嘉納は、柔道には武術としての柔道(攻撃防御を目的とした精力の最有効使用術)と体育としての柔道(身体を優良にする目的をもった精力の最有効使用術)があり、武術としての柔道にはあらゆる武術が含まれると考えていた(永田, 1994)。

柔術がもつ知的、精神的な面についての認識の隔たりも大きい。クーベルタンは、日本の格闘技が、体の各部をくまなく発達させるために利用されていただけでなく、判断力、冷静さ、心の動きを悟られないといった特質を伸ばすためにも利用され、一言で言えば、身体的、知的な鍛錬法であったと述べている。また、健康や教育上の観点を無視し、直接的な成功や、対戦相手に対して決定的な優位を得ることだけを求めるようになったとも述べている(Coubertin, 1912a)。柔術によって養うことが期待された知的、精神的な特質でさえも、攻撃防御の能力を高めることに関連して理解していた。

しかし、嘉納にとって、柔術とは、攻撃防御の技術を習得することを目的としながら、人としての道や平素の心掛け等の教育を受けるもの、あるいは習得するものであった。すなわち、技術の習得とともに、武士としての精神、武士としての階級的な行動規範ないしは道徳的、思想的な生活倫理を養うことを目指し、攻撃防御の技術を超えたものであったことに留意しなければならない。(永田, 1994: 94)

西洋人にとって特に興味を引かれることとして、クーベルタンは、柔術の成功の主要素に指の正確性と力があることを指摘した。西洋では指を訓練し、指の硬さを高めることはまったく意識されないからである。人間の指は、この長所をすぐに獲得することができ、金属と同じほど耐久性を持つようになるが、それでもやはりすぐに衰える。したがって、絶え間ない稽古によって指の状態を維持すべきであり、日本人はそれを怠らないと述べた。(Coubertin, 1933)

2. 柔術とスポーツのちがいを

クーベルタンによれば、柔術は、防御の手段としてなら素晴らしいもので、高い水準にあるが、スポーツではないと言う。その理由について、次のように述べている。

「稽古と(決して起こすことができない)現実の真の戦闘を除けば、柔術では一部の要素が欠落

した儀礼的な練習をすることしかできないからである。もちろんスポーツからあらゆる決まり事を排除すれば有利になるが、スポーツが受け入れることができるタイプのルールもいくつか存在する。例えば、フェンシングは公式の攻撃範囲を相手の胸部に限定することを進んで受け入れており、レスリングは危険と判断される技の使用を禁止することに同意している。少なくとも腕を引っ張らないし、加えた力を制御したり中断したりすることは控える。一方、柔術では、どうしてもそうせざるを得ない。・・・生徒同士で練習試合をすると、技の動きをあまりに正確になぞり過ぎて腕を折ってしまうという厄介な結果になることが多い。戦闘の方法としては賛辞となるが、スポーツとしては非難される。スポーツをする最大の喜び、最大の効用とは、自分の力を存分に使い、最後まで『力を出し切る』ことが許される点にあるのではないだろうか。フェンシングとレスリングは、慎重に制限された規則によって定められた限界の中で自由に力を発揮することができ、そのリーチを縮めるものは何もない。反対に柔術では、大半の技はちょっと披露するだけで満足する必要があり、技を強く掛け過ぎることで相手を不具にするのではないかという恐れが常に頭を支配する。」(Coubertin, 1933)

だが、クーベルタンは、このことが理由でこの運動を習うのを差し控える必要はないと言う。稽古を通して迅速で決定的な技を知ること自体の価値は認めながらも、スポーツがもたらすような深い満足をこの運動から得るのは諦めなければならないと述べた (Coubertin, 1933)。この視点に立つと、柔術はスポーツの範疇には入らず、一方の柔道はスポーツの範疇に入るものであった。

3. 柔道について

嘉納治五郎による講道館の教を横山作二郎と大島英助がまとめた『柔道教範』が西洋の諸言語に翻訳された (Coubertin, 1912a)。クーベルタンはこれを参考に柔道についての知識を得たもの

とみられる^{注2)}。

クーベルタンは、嘉納と柔道の誕生について次のように理解し、嘉納に尊敬の念を抱いていたことがわかる。1882年6月に嘉納師範がほとんど消滅しかかっていた柔術を「柔道」の名のもとに再興した。その成果はすぐに現れ、柔道は大変な人気を博し、講道館の名声はまもなく国外にまで広まった。近代日本の傑出した人物の一人として知られている嘉納師範は、かつての柔術を合理的に整理し、興味深くない技は廃止し、先人たちに知られていなかった数々の技を追加し、そのすべてを論理的かつ科学的な方法で体系化した。この教えは明快で、秩序も体系もなく教えていた昔の柔術の師範たちが、隠し持っていた必殺技を数人の特別な弟子だけに伝授したような「秘技」などという発想はなかった。柔道は、こうして完全に明解で、日本国外でも習得可能な若いスポーツとして我々の前に姿を現した。これが、かの名高い創始者が望んだことである。(Coubertin, 1912a)

クーベルタンは、横山と大島による教範に従って、柔道の優れた要素は何か、柔道の独自性はどこにあるか、柔道から生まれる訓練の完成度はどのような原理に基づいているかについて検討している (Coubertin, 1912a)。

クーベルタンは「柔道が『知性』の鍛練である」という主張を認め、柔道の優れた要素は、「体による感知」を磨き上げる知性であると述べた。それは次のように説明された。

「視覚による感知では不十分であり、日本で『体による感知』と呼ばれているものが必要である。この表現は定義のしようがないが、まさにぴったりの表現であると感じられる。バランスという新たな感覚を発達させるに至った体は、相手の体の内部で起こる外からは見えないバランスの喪失を、すべて知覚し、利用できるようになる。同様に、柔道の師範ともなれば、自分の重心がどこにあるかを考えるまでもなく誤らずに感じるができるようになるだけでなく、その技術が相手の重心にまで及ぶようになることができる。

このような柔道家は暗闇の中でも戦うことができる。一瞬の接触、一瞬の感触から情報を得ることができる。この域に達するには知的な素養が必要であることは歴然としている。鈍重な精神は使いものにならないだろう。この意味において、日本人には『柔道で上達するには賢くなければならない』と言う資格がある。」(Coubertin, 1912b)

クーベルタンは、柔道が、対戦相手を倒すために力学の法則を応用していることが欧米流の競技から際立たせている独自性であると述べている。柔道のあらゆる技、あるいはほぼすべての技は、相手のバランスを崩すことを前提に成り立っている。ただしこれは、自分自身が完全にバランスを保った状態でなければ成功しない。ボクシングやフリースタイル・レスリング、グレコローマン・レスリングの選手にとっては、「不意を突く」ことが自らの技術の出発点であると同時に終着点でもある。「不意を突く」と言うと、バランスを崩すのと似たようなものと思われるかもしれないが、柔道において成し遂げられる真の完成の極みは、そのように機械的にバランスを崩すことではまったくない。柔道では、前もって相手のバランスを崩した場合であろうと、相手が自分自身でバランスを崩した場合であろうと、「対戦相手がバランスを崩している方向に力を加える」ことで、ごくわずかな力でもあっても大きな効果を生む。(Coubertin, 1912b)

クーベルタンは、柔道が理論においては学問的に確立され洗練された方法で、そして実践においては驚くほど精密な方法で行われており、このような技術は、日本以外の国でも直感的には獲得できていたが、日本だけがひとつの様式に形作ることができたこと、そして教育者の嘉納による改革以来、この様式は日本において究極の完成度に達したと言うことができる、と評価した。(Coubertin, 1912b)

4. 嘉納治五郎による柔術・柔道論との比較

ここでクーベルタンが理解した柔道と永田の説

明による嘉納の柔道について比較してみよう。嘉納にとって柔道とは、「如何なる仕事をする場合でも、その仕事を最もよく、しかも完全に仕遂げようと思えば、必ずその目的のためには、精神、身体、力の力を最も有効に使用しなければならない」ところの「心身最も有効使用道」であり、それを示す端的な表現として「柔道」という名称を用いたとされている。そしてその使用道を教えることを本体として、道の応用として技術を教えた。すなわち、道を体得することを目的とし、技術はその手段として練習することになっている。講道館柔道は武術や体育であると同時に知徳の修養であり、社会生活改良、思想善導の方法であるとされている。(永田, 1994) こうしてみると、クーベルタンの柔道理解は、狭義の運動技能およびスポーツとしての柔道であり、知徳や社会生活、思想には及んでいなかったことが明らかになった。

ま と め

クーベルタンは、柔術については日本人柔術家から柔術を学んだスイス人のA. シェルピロの著書を通して知識を得、また柔道については横山作二郎・大島英助による『柔道教範』の翻訳本を情報源としていた。クーベルタンにとって、柔術は、いかなる武器も使わないさまざまな格闘技の総称であり、攻撃と防御の方法が網羅し尽くされているとして評価しながらも、そのコントロールの利かない攻撃性ゆえにスポーツとは認めなかった。一方、柔道については、力学の法則を応用して対戦相手を倒す手法に他の競技にはない独自性を見い出していた。柔道の優れた要素は、「体による感知」を磨き上げる知性であると認識していた。

柔術と柔道という日本の二つの身体文化を通して、クーベルタンは、日本人の技能習得に向けた正確さや弛まぬ鍛錬、柔道においては他国には例を見ない論理的科学的な完成度の高さを賞賛していた。しかし、これらの身体文化の捉え方は、知的な要素を伴うことの重要性を認識しつつも、そ

れらは技能を高める脇役であり、嘉納が説いた道の体得を目的とした広義の柔術や柔道の理解ではなかった。それは、クーベルタンの情報源となった書物による限界であったのか、それとも西洋人には理解しがたい日本的な思想のゆえであったのだろうか、今後の追究課題としたい。

さらに、日本がオリンピック初参加を果たした1912年ストックホルム大会以降にクーベルタンが嘉納と直接接触していく中で、クーベルタンの日本の身体文化に関する理解に変化が見られるのか、また、クーベルタンは1906年にIOCの機関紙“Revue Olympique”に掲載した柔術に関する論考の大部分を1933年にスポーツ教育学国際事務局報告書に再掲しているが、その背景や同時代の柔術と柔道の国内外の動向についても、資料を収集して検討していきたい。

本研究は、平成30年度国土舘大学体育学部附属体育研究所の研究助成により実施された。

注および引用・参考文献

注1) 「柔術」の英語表記は、jujitsu, jiu-jitsu, jiu-jitsu, ju-jutsuの4通りがある（ジーニアス英和辞典 第5版, 大修館書店, 2014）。本稿では、ピエール・ド・クーベルタンが記述していたJiu-Jitsu（フランス語と共通）を用いた。

注2) 海軍中尉ル・プリウールによるフランス語訳

- ・永田英二（1994）「柔道」・「柔術」・「武道」等の関係を考察する。柔道, 65（10）：94-96.
- ・永田英二（1999）嘉納治五郎の体育観・身体観から、柔道, 70（5）：97-101.
- ・Pierre de Coubertin（1906）A Propos du Jiu-Jitsu. Revue Olympique, janvier, pp.5-7.
- ・Pierre de Coubertin（1908）Les Préliminaires du Jiu-Jitsu. Revue Olympique, 8e année, mars, pp.41-44.
- ・Pierre de Coubertin（1912a）Le Judo. Revue Olympique, 12e année, I, janvier, pp.11-13.
- ・Pierre de Coubertin（1912b）Le Judo. Revue Olympique, 12e année, II, février, pp.24-27.
- ・Pierre de Coubertin（1933）Le Jiu-Jitsu est-il un sport? Bulletin du Bureau International de Pédagogie Sportive, Lausanne, s.d., n° 9, pp.11-13.
- ・坂上康博編著（2010）海を渡った柔術と柔道。青弓社.
- ・横山作二郎・大島英助共編（1913）柔道教範。二松堂書店。国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/932358>